

40. Sigmoid sinus occlusion と Arteriovenous shunt を示した中耳扁平上皮癌の1例

城倉 英史・金山 重明 (八戸市立市民病院 脳神経外科)

中耳扁平上皮癌の頭蓋内への浸潤に伴い、血管写上外頸動脈分枝 (posterior auricular a. ascending pharyngeal a. middle meningeal a. occipital a.) から腫瘍陰影あるいは硬膜を介し、虫喰い様の壁不整を認める transverse sinus へ A-V shunt を示し、さらに sigmoid sinus の完全閉塞を伴う症例を経験した。

症例は、耳痛、頭痛を主訴とする64歳の主婦で、左 V, VII, VIII, IX, X, XII, 脳神経麻痺を認めた。これに対し9回にわたり、ペブレオマイシン計 120mg, ACNU 250mg の動注を行い、約半年にわたって、疼痛及び腫瘍の増大をおさえることができた。

この症例の示した shunt flow は、悪性腫瘍に見られる A-V shunt とも考えられたが、sinus occlusion によって生じた、いわゆる dural arteriovenous malformation であることも考えられた。

41. 悪性腫瘍の海绵静脈洞転移の3症例の検討

高松 秀彦・川合 裕 (国立札幌病院第3) 佐藤 純人・藤原 秀俊 (外科脳神経外科)

悪性腫瘍の海绵静脈洞への血行転移と考えられた3症例について神経学的検討と CT 所見を中心に報告した。

症例1: 42才女子。原発巣は甲状腺癌。肺転移あり、神経学的には右動眼神経麻痺にて発症。両側全眼筋麻痺、顔面痛へと進展。尿管症をも呈す。症状固定後50日で死亡。

症例2: 59才女子。原発巣は腎癌、肺・肝転移あり、神経学的には右外転神経麻痺にて発症、両側全外眼筋麻痺に進展、症状固定後20日で死亡。

症例3: 5才半男子、急性リンパ性白血病の再発、前額皮下腫瘤の精査中に発見、神経学的所見なくも下垂体前葉機能不全あり。

以上3症例とも発見時すでにエンハンス CT で強い増強効果を伴う両側海绵静脈洞の腫大がみられ、症例3では化学療法により消失した。神経学的特徴として、外眼筋麻痺により発症、左右鏡い合うような神経学的進展、眼静脈還流障害による症状の欠除などがある。

42. 当科における転移性脳腫瘍の治療成績

鈴木 望・相沢 希 (旭川医科大学) 佐古 和廣・代田 剛 (脳神経外科) 大神正一郎・米増 祐吉

転移性脳腫瘍は年々増加傾向にあり、脳神経外科医が治療にたずさわる機会は益々多くなってきていますが、その治療方針に関しては議論の多いところです。過去6年間に当科で入院治療した転移性脳腫瘍30症例の生存期間、神経学的機能、死因を検討した結果は、次のとおりであった。

1) 転移性脳腫瘍に対する手術療法は、神経学的機能を早期に改善させ、長期生存の可能性を与える。

2) 単発性脳転移に対する手術療法群では、大部分が原発巣ないし全身転移で死亡した。原則として手術しか行っていないことから、術後の全脳照射を加えても予後にはあまり影響しないと考えられた。

43. 橋部および傍橋部海绵状血管腫の手術

吉本 高志・藤本 俊一 (東北大学脳研) 溝井 和夫・鈴木 二郎 (脳神経外科)

海绵状血管腫は、橋部が好発部位の一つであるが、その発症様式は、さまざまであり、かつ、諸検査で特徴的な異常所見を同定しにくいいため、生前での診断、さらにはその根治手術の成功例の報告はまれであった。

我々は、5例(橋背部3例、傍橋部2例)の血管腫の症例を経験し、4例に対し直接手術を行ない、術前の神経症状を悪化させることなく血管腫を全摘し得た。

本報では、従来、解剖学的に直達手術が困難とされてきた本病巣に対する我々の経験を、CT, NMR 所見とあわせて報告した。

44. 小脳出血で発症した脳静脈性血管腫の2例

桜木 貢・中川 端午 (北海道脳神経) 三森 研自・都留美都雄 (外科記念病院) 金子 貞男・阿部 弘 (北海道大学 脳神経外科)

静脈性血管腫が臨床的に診断され、手術の対象となった例は少ない。私共は最近、小脳出血で発症した2例を経験したので報告した。

症例1. 14才男性。突然の頭痛、歩行障害で発症し入院。小脳性失調、Cerebellar fit 出現し、次第に意識障害も加わった。CTにて左小脳から虫部に heterogeneous high density mass あり。VAG 静脈相にて左小脳半球部に Umbrella sign を認めた。この際左 Inferior Vermian Vein の造影は認めなかった。後頭下開